

働きます。此のお鍋が来てからといふものは、お上の用は申すに及ばず、お店の若い衆から、丁稚さんに至るまで、襟垢の付いた物は着た事が無い。また、お店で荷造りが手張ると、お店へ出て来て荷造りの手助けをいたします。

また俄雨が降つて、若い衆が二人も掛らな持てぬ様な品物でも、お鍋が、わしが持つてあげると云ふ。内では、お鍋くんと調法がられて居りましたが或る日の事、甚ふ荷造りが手張つて、此調子なら、日が暮れて一刻餘りもせぬと濟まぬと思ふて居たのが、案外早ふ片付きました。そこは人を使ふ主人、それ相應に目の有るもので、常は香々でお茶漬も、今日はどうどの一膳も付けて、ゆつくり御飯を喰べて、宵寝を仕とくれやと云はれますと、さて宵寝も出来ぬと見へて、お店の人が皆集りまし

た。

「ナア、豫想より早う片付いたなア」

「そうや、どうしても、日が暮れて、一刻の餘はかゝると思ふて居たのに、早う濟んだ。しかし内の旦那はなか／＼腹があるなア。いつもは香々で茶漬やのに、うどんの一膳もつけて、ゆつくり御膳を食べて宵寝をして呉れと云はれても、さて宵寝も出来ずと云ふて、遊びに出るわけにもいかず」

「それが奉公の身の上や。處で、いづぞはお前に話をせうと思ふて居たんやが、内のお鍋や。来た時にはあんな妙な顔をしてよるので、爪はじきをしてたが、人には附合ふて見い、馬には乗つて見い

とは此の事やなア、よう働きよるやないか、誰彼なしに用事をして呉れる丈け嬉しいなア」

「そうや、此間もあんまり下帯がよごれて居るので、洗濯をせうと思ふて、ひまがないので二階へ突込んでおいたんや、上つて見ると無いね、捜してると、そこへお鍋が上つて来てお前さん何を捜してるのやと尋ねよる。まさかふんどしを捜してるとも云へんので、チョツト捜し物をしてゐるのんやと云ふたら、是れを捜してるのぢやると、出して呉れた。見ると、チャンと洗濯がしてあるのや、云はいても仕て呉れる丈けうれしいやないか」

「私が、足袋がよごれて、おまけに指の先に穴があいたアるね、履かんつもりで、ほり込んでおいたら、チャンと洗濯がして、つぎがあてゝ、のりつけて、履けるやうにして呉れたアるね。お前の事を仕て、私しの事をせぬと、何や人間のわけへだてを仕てと思ふが、誰彼無しに、普通に仕て呉れるだけうれしい」

「ところでお前、あのお鍋を女房に持つか、横町の葛籠屋の女婢を女房にするかと云ふたら、どつちを女房に持つ」

「えらい又、變つた尋ねやうやなア、お前やつたら、どつちを持つ」

「まア、内のお鍋を女房にするなア」

「お前も又物好きいな、あんな人三化七を女房にせんかても宜いやないか」